



Title	阪大英文科の43年・Osaka Literary Review の30年
Author(s)	藤井, 治彦
Citation	Osaka Literary Review. 1991, 30, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25443
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

阪大英文科の43年・

Osaka Literary Review の30年

藤 井 治 彦

Osaka Literary Review が第30号を出すという。第20号が出たときには、この同人誌を作ったときの事情を、創刊の頃の同人の一人として、書かせてもらったが、あれから更に十年の歳月が流れたことになる。時は、夢の中のように、音もなく過ぎ去ってゆく。この同人誌の母体を成している大阪大学の英文学・英語学関係の人々も次々に変化した。今の同人の中には、この雑誌より後に生まれた人さえいるのだから、古い歴史のことなど忘れられてもしかたない。しかし、人間は、自分の属する集団がどのようにして成立したかということ、折に触れて、自覚しておく方がよいであろう。今回はそういうことも考えて、英文学科創設の頃の先生方について、個人的な思い出を書かせて頂きたい。

大阪大学の文学部は1948年（昭和23年）秋に旧制の大阪帝国大学の法文学部の一部として発足した。英文学講座は発足したときから存在していたから、文学部の中でもっとも歴史の長い講座のひとつということになる。初代の教授は竹友甬雄（藻風）である。藻風は、上田敏の高弟であり、詩人であり、おびただしい数の研究、翻訳、エッセイを残した。若い頃、アメリカで勉強し、コロンビア大学のMAであった。そういう経歴のためもあるが、素晴らしい速さで英語の書物を読み、生き生きとした英語を駆使することができた。もっと大切なことは文学そのものについての感受性をあくまでも尊重したことである。文学を文学として大切にそのときの助教授であった矢本貞幹先生にも共通している。後に、文学社会学のようなやり方を、理想の学問として、強く主張する研究者が学界に現われたとき、矢本先生は私に「あんなことを言う人は間違っていると思う」

と小声で、しかし、きっぱりと言われた。先生の関心は批評の方法にあった。それは先生が恩師土居光知から受け継がれた問題であった。藻風は定年を前にして、1954年に世を去り、矢本先生は1956年、職を辞された。竹友・矢本時代の一時期、のちに英語史の権威となる松浪有氏（現在、青山学院大学教授）が助手をなさっていた。現在17世紀英文学研究会の会長である、杉本龍太郎氏（現在、大阪女子大学教授）も、その頃の助手である。そしてこの最初期の学生であった先輩たちの中に、その後の日本のシェイクスピア研究の代表者となった、伝説的な秀才、笹山隆氏（現在、関西学院大学教授）がおられる。

1955年から1959年まで教授の職にあられたのは、加藤猛夫（東知）先生である。先生は温和な、まるまるとした体躯の、古風な紳士であった。戦前は見事な髭をぴんと立てておられたということであるが、この頃は、地味なちよび髭に変えておられた。いつも編上げ靴を履いておられたのは何か理由があったのだろうか。男女の服飾の歴史にお詳しい方であった。講義は英語で準備され、それを黒板に書かれた。一方、演習では文語調で訳を付けられ、試験の答案もその文体で書くことを学生に要求された。先生の著書は千ページ近い、膨大なミルトン研究であるが、その刊行は先生のご生前には間に合わず、亡くなられた直後に出版された。先生は病院のベッドで完成近いその書物に思いを馳せ、贈呈すべき人々の名を挙げて書き取らせつつ、その途中でお亡くなりになられたと聞いている。

加藤先生の時代の後半3年間は、助教授は空席で、先生の去られた後、1959年、村上至孝先生が教授として着任された。先生は、英語は当然ながら、古典語、ドイツ語、フランス語、イタリア語などもよくおできになり、ヨーロッパ文学の古典といわれるような作品を原典で、実に広く読んでおられた。また先生ほど素直に、癖のない文学鑑賞をなさった方はいない。大学院の演習などで、生意気盛りの院生がひねくれた解釈をすると、途方に暮れたような顔をされて、静かにその読み方を退けられた。先生は全身全霊をあげて感じる事を好まれ、頭の中で理屈を作り上げることを嫌われ

た。先生のお書きになるものには、若い頃から、老成した地味な落ち着きがあり、しかも最後まで青年のような若さとはにかみを失われなかった。村上先生はワーズワースについてと新古典主義の詩について、二冊の大作を残された。

竹友、矢本、加藤、村上の諸先生は既に世を去られた。これらの先生のなされたことを、もしいちいち書きつけるならば、一冊の書物もそれを収めきれないであろう。

この後のこと、ことに70年代後半以後のことは、若い人々も、比較的よく知っておられるので、簡単に記すことにする。1960年に村上先生の助教授として着任された山川鴻三先生は、1974年、教授となられ、1981年までその職にあられた。ご退職後は追手門学院大学、仏教大学で教えられた。今もお元気で、毎年のようにヨーロッパにおでかけになり、お好きな美術品を見て回っておられるのは、まことに羨ましい境地である。1975年、藤井治彦が助教授となり、1981年に教授となった後、1983年、玉井暲先生を助教授にお迎えし、さらに1988年には石田久先生が新しい性質のポストの教授として着任された。

1960年には英文学第二講座が設置され、1961年、毛利可信先生が教授としてご着任になった。この講座が英語学講座という名になったのは、1963年のことである。1968年、成田義光先生が助教授になられた。毛利先生は1980年に定年を迎えられた。その後、大手前女子大学教授として、研究と教育にご活躍を続けておられることは周知のとおりである。成田先生は、1980年に教授となられ、1982年に河上誓作先生がその講座の助教授に着任された。1989年、成田先生が関西学院大学に移られ、河上先生が教授となられた。そして、1991年に大庭幸男先生を助教授にお迎えしたのは、もっとも新しい変化である。

1948年に始まる大阪大学英文科の歴史の中で、*Osaka Literary Review* が誕生したのは、発足から15年目の1962年、村上、毛利、山川の三先生の時代であり、それからまた30年の歳月が流れたことになる。なるほど、私

たちの歴史は明治時代に創設されたような、古い大学の英文科の歴史に比べればまだまだ浅い。それでも私たちは既にかかなりの歴史を持っているのである。その歴史をどのように理解するかは、人それぞれによってことなるであろう。また阪大の英文科に対する評価は、現在と将来の同人諸君が何を達成するかで、次第に定まってゆくであろう。私たちが歴史を持つ存在であることについて、同人諸氏の自覚を促し、*Osaka Literary Review*の発展を心から祈りたい。